

三社祭 (弥生の花浅草祭)

へ弥生なかばの 花の雲 鐘は上野か浅草の 利生は深き宮戸川
誓ひの網の古へや 三社祭の氏子中 へもれぬ誓ひや網の目に
今日の獲物も信心の おかげお礼に朝参り 浅草寺の観世音 網の
光りは夕あぢや 昼あみ夜網に凧もよく 乗込む 河岸の相場にし
けは 生貝生鯛生鰯 なまぐさばんだばさらんだ わびた世界ぢや
ないかいな へそなた思へば七里が灘をのう 命や捨貝きたものなし
かえ戻らうよ 捨貝来たもの 命や すぐが来たものなしかえ戻
らうよ サアサ何んとしよか どしよかいな へ撞いてくりやるなハ
幡鐘よ 可愛いお人の目をさます お人の人の 可愛いお人の人の
目をさます サアサ何としよか どしよかいな へ帰りましょ へ待
たしやんせ 憎や烏が啼くわいな へ斯かる折柄虚空より 風なま
ぐさく身にしむる 呆れて暫し兩人は 大空きつと見あぐれば

へ善か悪かの二つの玉

へあらはれ出でたは

へこいつは

へ稀有だわえ

へアーラ 不思議やな へ一つ星なら 長者にも ならんで出たる
二ない星 あらはれ出でたる二つ玉 へ思ひがけなく落散る風の
ぞつと身にしみうろたへ伏し 悶絶するこそ へ悪にとつては 事もお
ろかや 悪七別当 悪禅師 保元平治に悪源太 梶原源太は梅
ケ枝を 蛭の地獄へ落したためしもありとかや へこれは昔の物語
へそれがいやさに 気の毒さに おいらが宗旨はありがたい 弘法大
師のいろはにほへと かはる心はからくり的 北山時雨ぢや ないけれ
ど へ振られて帰る晩もあり それでお宿の首尾もよく へとかく
浮世は 儘にはならぬ 善に強きはコレ善の綱 へ牛に曳かれて善
悪は 浮かれ拍子の一踊 へ早い手玉や品玉の 品よく結ぶ玉だす
き かけて思ひの玉櫛げ 開けて口惜しき玉手箱 かよふ玉銚 玉
松風の もとはぎんぎでうたへや うかれ烏の烏羽玉や うややれ
さうだぞ 声々に へしどもなや へ唄うも舞ふも 法の奇特に
善玉は 消えて跡なく失せにけり。